

本谷温泉をめぐる郷土の古代史

伊予温湯

いよのゆ

日本書紀によると、西暦六三九年、舒明天皇は皇后（のちの斉明天皇）とともに、伊予温湯に滞在されたときれています。本谷温泉近くには、舒明天皇勅願所と伝わる実報寺のほか、舒明天皇が訪れた伝説も残ります。舒明天皇は夫妻で湯治を目的に訪れたと伝わることから、伊予温湯は古くからみやこびにも親しまれてきた温泉をイメージしています。



伊予温湯

石湯

いわゆ

西暦六六〇年、朝鮮半島で日本と親密な交流があった百済が唐と新羅の連合軍に滅ぼされる事変が起こりました。舒明天皇は、百済からの援軍の要請に応え、朝鮮半島に軍を送ることを決断します。日本書紀によると、西暦六六一年、百済の救援に向かう舒明天皇は、伊予の国の熟田津石湯に立ち寄ります。

熟田津の歌

熟田津に 船乗りせむと月待てば
潮もかなひぬ 今は漕ぎ出でな

※熟田津で出港しようとして月を待っていると、潮の具合もよくなったので、今こそ漕ぎ出でよう。援軍の一員、額田王が詠んだ歌は有名です。



石湯

永納山城と本谷温泉

石湯とは、石の神として信仰されていた少彦名命が全国の温泉開基に関わったとの言い伝えに由来するものと考えられています。館内の石湯もそうした伝承をイメージしています。



永納山城跡に残る土塁（発掘時の写真）

西暦六六三年、朝鮮半島の白村江で、百済復興のため本と百済の連合軍は、唐と新羅の連合軍に敗れます。

これにより百済が完全に滅亡し、日本は唐と新羅の侵攻に備えて北部九州から瀬戸内海沿岸に城を築きました。市内河原津から今治市孫兵衛作にかけて位置する国史跡永納山城跡は、このような時代背景から築城されたと考えられる古代山城の一つと言われています。館内の壁の一部は、実際に永納山城跡に残る、土を突き固めながら積んでいった土塁を表現しています。

石鎚山と本谷温泉

熟田津の歌の



休暇村瀬戸内東予（楠河地区）から望む石鎚山系

六〇〇七〇年後、万葉第三期の宮廷歌人だった山部赤人は、伊予の国を訪れて、その景色の素晴らしさを「凝々しかも伊予の高嶺」と詠んでいます。伊予の高嶺は西日本最高峰石鎚山を指していると言われ、石鎚山を主峰とする四国山系が最も美しく、連山全てがパノラマのように展開して見える場所は本谷温泉がある庄内地区や楠河地区です。そのため、この歌は本谷温泉近くからの眺望のすばらしさを詠ったものではないかとも考えられます。館内の壁の一部は、この万葉の時代から使われてきた露草色を表現しています。

山部赤人の歌から一三〇〇年

赤人は前述の歌の反歌で「熟田津に船乗りしけむ年」と詠み、舒明天皇や舒明天皇がかつて伊予の国に行幸した昔を偲んでいます。赤人の歌からおよそ一三〇〇年が経った現在、我々がかつて赤人がそうしたように、本谷温泉から古代に思いをはせてみてはいかががでしょうか。